

▲7月12日(土)、13日(日)に行われた演劇コンクールの受賞団体にお話を聞きました。

第5回せんがわ劇場演劇コンクール
受賞団体インタビュー

劇団820製作所
ハニワ
(代表・波田野淳紘さん)

「グランプリ、そして演出賞と脚本賞受賞おめでとうございます。波田野さんはどんなきっかけで演劇を始めたのですか？」

波田野 初めて劇場で演劇を観たのが高校生のときでした。その頃、横浜にあるテアトルフォンテという劇場で、中高生のための演劇ワークショップが毎年開催されていたんです。友人がそのワークショップの出身者で、彼に誘われてその卒業生による自主公演を観にいった。衝撃を受けましたね。みんな高校生だったんですが、いま思い返してもため息の出



後列：グランプリ受賞の「劇団820製作所」の皆さん
手前：同劇団代表、演出賞・脚本賞受賞の波田野淳紘さん（撮影／青二才児）

るほど面白い芝居で、観ているうちに「どうして僕はあちら側にいないんだ！」と思っちゃって。『踏みはずし (Retake)』を今回のコンクールで上演しようと思われたのは、どんな思いがあったのでしょうか？」

波田野 同じタイトルの『踏みはずし』という芝居を昨年十月に上演しました。二〇一二年に劇団の未来が見えない状況になり、一年近く新作を作る機会がなかったのですが、その間にため込んでいたエネルギーを全部その芝居に注ぎ込んだんです。二〇分の短編芝居だったんですけど、母親、娘、父親の家族の話で、それぞれが五分前後のモノローグを語り、会話もするけど全然かみ合わなくて終わる……という、「関係の崩壊」を描いた、まるで光のない芝居になりました。苛々してたんですね、その頃。手ごたえのある作品でしたが、苛立ちをぶつけるだけじゃ子どもの態度だなど反省し、どこかで再演をしたかった。娘の役に焦点をあてて、光のある方向に膨らませてみようと思っていたとき、偶然、せんがわ劇場のコンクールが四〇分以内というルールだということもあり、応募しました。

「ところで、仙川の街の印象はどうですか？」
波田野 初めて来たのは、去年のグランプリ受賞公演を観に来たときなんですけど、すごくいい街だなとびつくりしました。人の背丈に合っているな、って。

「グランプリ受賞公演の構想はありますか？」

第5回せんがわ劇場演劇コンクール審査結果

- 団体賞
＜グランプリ＞
劇団820製作所
『踏みはずし (Retake)』
(代表 波田野淳紘さん
＜演出賞、脚本賞＞)
- ＜オーディエンス賞＞
イマカラメガネ
『心配な女』
(代表 松田文さん)
- ＜特別賞＞
劇団ポニーズ
『HIPHOP 町工場』
(代表 青山健一さん)
- 個人賞
＜俳優賞＞
洞口加奈さん
(劇団820製作所)

波田野 新作だったらこれをつけてというのがあります。『悲しみ』という芝居なのですが、五年前からやるうやろう、と言いつつ続けていて、これでようやく。でも旧作の『Zumi』という芝居の再演もしたいし。悩みどころです。

「最後に、今後の野望をきかせてください。」

波田野 百年後の人に上演を考えてももうような戯曲を書きたい。一作だけでも、あとは、広くいろんな地域で芝居をしたいですね。講評のときに越光さん(※)が「日本のこの場所で演じていても、その表現は世界に発信するものであるべき」と仰っていて、その通りだなと思つて。それは「人間の背負ったものを描く」ということだと僕は理解しているのですが、それを描くための手持ちの手法が、まだまだとても貧しい。いま僕は時代の潮流とはおそろく違う保守的なスタイルを採用しています。生まれる作品はきちんとスリルのあるものにした。世界をこんなかたちで祝福できるのか、と自分もお客さんもドキドキするような、縛りがほどかれていくようなものを作りたいです。

(せんがわ劇場ホームページより抜粋)
※越光さん＝専門審査員 越光照文氏(演出家)

グランプリを獲得した「劇団820製作所」の受賞公演は、来年3月、せんがわ劇場で行われる予定です！ どうぞお楽しみに。

劇場を支える
様々なスタッフ

今回は、「ホールスタッフ」をご紹介します。電話の対応や、窓口でのチケット受付などを担当されているので、もしかしたら、劇場利用時にみなさんが最初に会えるスタッフかもしれませんね。

ホールスタッフのメンバーは、白鳥さん、柳さん、藤間さん、望月さんの総勢4名。お仕事の内容は、劇場への問い合わせ対応、ホールやリハーサル室の貸し館の受付業務、チケット取り扱い、広報など多岐に渡ります。その他、劇場事業(公演、コンサート)の補助なども行っています。

4人のうち、取材当日の勤務についていらした、望月さんと柳さんに、劇場業務の感想をお聞きました。

望月：演劇の人は明るくて、爽やかな人が多い。好感が持てます。劇場の仕事は総合力が大事だと思います。

柳：ご来場のお客様、とりわけ子どもたちの笑顔、ワークショップ参加者の素直にのびのびとしている姿を見ていると、劇場という場所に無限の可能性を感じます。



ホールスタッフの
柳さん(左)
望月さん(右)